

台湾茶の歴史を訪ねる 第二十回

(20) 二二八事件に散った大茶商 王添灯と
その一族 (1)

須賀 努 (コラムニスト/茶旅人)

王添灯、という名前に初めて触れたのは、確か台湾大学の図書館にあった1冊の本だったように思う。日本統治時代の台湾茶商の歴史を探していたところ、この名前に行き着いたのだが、その本に書かれていたのは茶商としてというより、民主運動家、そして二二八事件で行方不明となり、犠牲となったリーダーとしての王であった。なぜ茶商が民主運動なのか、なぜ二二八の犠牲者なのか、大変興味を持ったので、調べてみることにした。

王家のルーツ

王添灯について調べるにあたり、非常に多くの王家の人々と面談させて頂いた。その中で、王家のルーツについては、添灯の孫に当たる、王纘紘氏より、貴重な資料を頂いたので、それを基に紹介する。王家は福建省漳州府南靖県金山郷水頭村にいた王感に始まる。家が火事になった際、新しい環境を求めて台湾にやってくるらしい。清朝初期、1700年代の初め頃のことであった。

実はこの王家、その昔の葬儀に関わる習俗を見ると、イスラム教徒であった可能性があるというのは非常に興味深い。元代に色目人と呼ばれるイスラム教徒が泉州あたりで手広く貿易を行っていたことは周知の事実であり、漳州もその地域に含まれる。王添灯は回族なのか、いや往時世界を股に掛けたアラブの商売人の血も流れていたのだろうか。

当初は上陸した淡水付近に住んでいたようだが、添灯の祖父、清廉の時代に新店安坑に居を移したと思われる。そして茶も栽培する農家として暮らしを立てていた。父、綿長は茶栽培だけな



王添灯紀念輯 (張炎憲主編)



王纘紘氏と (王添灯の長男王政統の長男)

く、販売も手掛けるようになり、茶農との兼業であった。添灯の2歳下の弟、進益はその回顧の中で『父と一緒に船で台北大稻埕に茶を売りに行った』と語っている。同時に『祖父と叔父がアヘンを吸っており、家計は苦しかった』ともいう。

王添灯と茶業

王添灯はちょうど日本統治時代が始まってすぐ、1901年に新店で王綿長の次男として生まれた。1915年に地元の安坑公学校を卒業後、新店庄役場に勤務する傍ら、夜間中学にも通っていた。1929年には台北市社会科に雇われたものの1年で退職している。

その後1932年に黄経らと南興茶行を創設。ほぼ同時に身内や同郷の高天助らと文山茶行も設立し、茶業に乗り出していく。製茶担当は長兄の王水柳で、添灯は販売などを担当した。折しも日本が中国東北部に進攻し、満州国が設立された時期。文山茶行は台湾茶を満州に売り込むため、大連に支店を開設し、弟の進益夫妻を送り込んだ。

1937年には新店で同郷だった高良と共に文山製茶を新設。天津向け輸出では、文山・南興の合計で、大財閥三井と肩を並べるまでになっていた。だが1940年には戦時下となり、物価統制が始まり、茶の輸入が難しくなる。その時、大連の王進

益は日本留学（日大）時代の同級生と偶然再会し、彼の伝手で茶の輸入を認められ、益々躍進していったという逸話もある。ともあれ大連支店は業績を伸ばし、1941年三井をはじめ大手茶業者が居並ぶ中、満州における台湾茶販売ランキングで6位までのし上がっていく。

王添灯は1937年、茶業者として静岡県の茶業の現状を視察する機会を得た。静岡の茶葉生産効率は台湾よりはるかに優れているとの印象を語っており、『台北近郊の荒廃茶園の整備及び中南部、東部でも緊急に茶葉生産の奨励を行う必要がある』と述べている。また東京では内台茶業大会にも参加し、日本内地からも台湾茶業者として既に認知される存在となっていた。

また同年に官民合同で開催された『台湾茶発展の座談会』に出席しており、その発言が今も残っている。この年に設立された台北州茶出荷組合は資本金が農会から出され、事務経費の補助も受けており、民間業者を圧迫していると舌鋒鋭く、政府出席者を糾弾し、それに対して台北州勸業課長が苦しい言い訳をしている様子が見て取れる。更には議事をも一時紛糾させたようで、民主活動家である王添灯の面目躍如、といったところではな



文山茶行跡（貴陽街）



1937年 王添灯の文章

いだろうか。

更には1938年に台湾茶業『北支班』に参加して、南京、青島、済南、天津、北京、大連など各地を調査している。彼は台湾語、日本語の他、満州語（今の普通話か）にも通じていたため、非常に便利な存在だったと思われる。この旅の談話では『台湾茶は中国茶に品質では及ばず、しかも値段は高い』と言い放ち、将来を危惧している。『天津はすでに卸しががっちり市場を握っており、台湾茶の参入で見込みがあるのは小売だけ』とも述べており、実際に天津に小売店を出店している。

それにしても日本時代に、台湾人が日本資本の企業と堂々と渡り合い、文山茶行が急激に発展した理由の一つとして、添灯と同郷の高良、息子の高天助の存在が非常に大きかったという話もあった。彼らは英語を話し、茶業を得意とする外国商社である徳記洋行との関係が非常に深く、ここを通じて茶葉輸出が捗ったとみられている。尚高家の歴史については、別途調べを進めなければと思っている。

全くの余談ながら、当時の逸話として、面白い話が残っている。安坑の同郷同姓の茶農家に王長庚という人がおり、文山茶行はここからも茶葉を買い取っていた。苗字は同じ王だが、こちらは鉄観音発祥の地、安溪の出身だった。その息子が何と、後に台湾プラスチックを創業して一代で大富豪となった、台湾の松下幸之助とも称された王永慶氏であるというのだ。王も子供の頃、茶業の手伝いをしていたが、小作は儲からないので辞めてしまった、と後に語っているが、日本時代の茶業、本当に儲かったのは誰だったのだろうか。因みに現在台湾にある大病院、長庚医院は、実はこの茶農、王長庚から取られたものだ。

王添灯に話を戻すと、1940年には台湾茶輸出統制株式会社の董事となり、台湾茶の輸出に尽力している。更には国策として、1943年に蒙古向け磚茶を製造する、台湾磚茶株式会社の副社長にも就



台北 長庚医院

任している。この会社は、台湾茶葉を使って磚茶を作った訳だが、これはモンゴル人が生活上必要不可欠の磚茶を日本が供給する必要に迫られ、静岡や宮崎など内地だけでなく、台湾でまで磚茶を作らざるを得なかった厳しい戦時事情を物語っている。因みにこの台湾磚茶株式会社は光復後もしばらくは活動していたが、その詳細は不明である。

光復後、王添灯は台湾省茶業股份有限公司の董事長となり、日本が去った後の三井の茶工場など日本の茶業資産はこの会社が接収した。ただこれは恐らくは名義だけであり、実際は台湾の一大産業であった茶業資産を接収したのは中国大陸から来た国民党だったはずだ。そしてその接収部隊は福建から来た茶の専門家たちであり、その中には前回紹介した林馥泉らが含まれると思われる。

因みに台湾省茶業股份有限公司の幹部は、当時の茶商公会幹部とほぼ同じ顔ぶれであり、官製であったことは明白だ。尚、副董事長は後に台湾政財界の超大物となる辜振甫氏が就任している。辜は台湾の五大財閥の1つ、鹿港辜家の出身で、父親は台湾が日本に割譲され、日本軍が上陸した際、台北の門を開けたあの辜顕榮である。

辜家の茶業は、大裕茶行という名称で、日本時代にはじまり、王添灯と並んで、満州・華北への台湾茶輸出をしており、父が亡くなった後、若く

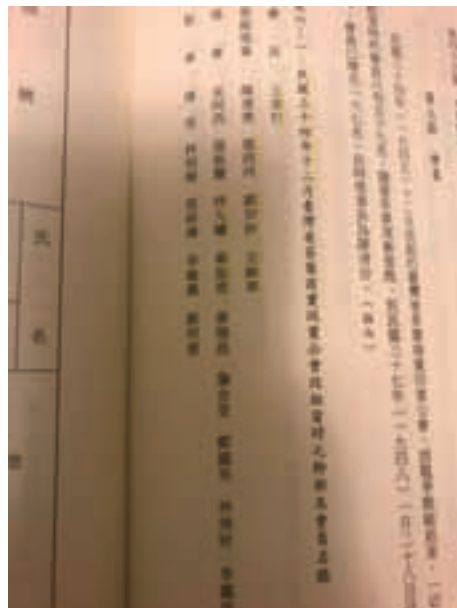


台湾省茶業公司 董事長

して家督を継いだ辜振甫が名義的には代表者になっていたものの、彼にとっては家業の事業の一つに過ぎなかったはずである。この辺りの事情について、辜公亮基金会に尋ねてみたが、『生前、茶業について語ったのを聞いたことがなく、またその資料もない』との返事ももらっている。

尚、辜振甫はこの茶業公司以日本茶業資産接収が終わった直後に、台湾独立派と見なされ、逮捕・勾留されてしまう。そして幸か不幸か、二二八事件の際も留置場におり、その難を免れているが、この辺りの数年間については自ら語ることは全くなかったようで、資料も見ることができない。因みに彼が留置された場所は、日本時代の西本願寺の建物地下だと言われている。西門町にあったその建物はその後取り壊されて、その場所も分からなくなっていたが、最近になって再建されている。

1946年王添灯は台湾省茶業商業同業公会会長にも就任し、台湾茶業界のトップに上り詰め、代表的な人物となった。しかし情勢は戦後の混乱期であり、輸出もできなくなり、商売には難しい時代だった。そして台湾を取り巻く環境は、そんな彼の前途を大きく阻んでいき、また彼自身も茶業ではなく、台湾の将来を見据えた活動に力を注いでいくことになる。



台湾省茶業商業同業公会 会長就任

王添灯と二二八事件

光復後、台湾茶業界のトップに立った王添灯だったが、悲劇が彼を見舞うことになる。1947年2月、いわゆる二二八事件が発生し、彼は二二八処理委員会の代表として、行政長官陳儀に台湾人の三十二項要求を伝えて、談判を試みている。その数日後に連行され、その消息についてはいまだに公式にはわかっていない。ガソリンを体に掛けられ焼き殺された、という証言があるとのことだが詳細はいまだに不明のまま。

王はなぜこの事件に関わったのだろうか。日本統治時代から、彼は民主運動家であり、1930年には楊肇嘉らが主催した台湾地方自治連盟に加入し、幹部に名を連ねていく。実は茶業より台湾自治運動の活動の方が早かった（本業）のである。日本の統治に問題を提起し、地方自治の方向性などを示したため、講演会は警官に止められ、自らも拘留された経験もあるという筋金入りの闘士だった。

因みに茶業に関しても、1937年の茶商公会の役員改選に絡んで台湾日日新聞に『王添灯一派の策動により、揉めた後に投票』などという記事も見



二二八処理委員会 常務委員選出

られ、詳細は不明ながら、新興勢力の王が、副組長就任を画策（最終的には台北州知事の裁定で評議員となる）、日本統治並びに旧体制への抵抗を試みている様子が見てとれ、そして記者は民主活動家という側面でこれを記事にしている。

かたやある意味国策で満州に大量の茶葉を輸出しながら、もう一方でその統治政策を批判しているのが王添灯なのだ。その二面性が非常に興味深い。かつてこのような人物が台湾や日本にいたのだろうか。ただどのようにして、この2つの活動を分けていたのかについては、はっきりしたエビデンスを得ることが出来ていない。ただ1937年に台湾地方自治連盟が解散、そして茶商組合で策動していることから、この年以降は茶業が中心だったのかもしれない。

1946年前後には、台北市参議員、省参議員に当選し、汚職官僚を糾弾するなど、日本が去った後の台湾民主化を目指したその姿勢は、鉄面議員と称されたという。また人民導報という新聞の社長を務め、言論界からも民主を後押しした。『最大多数の最大幸福』をスローガンに掲げ、その実現に邁進していた。

そこに二二八事件が発生する。事件後、すぐに

軍や警察の発砲阻止、逮捕された市民の釈放、官民共同の処理委員会の開催などを要求、宣伝部長の役割を果たしていた。更には『三十二項処理大綱』をまとめて提案するなど、実質的な台湾民衆のリーダーであり、政府から見れば、最も厄介な存在であったことはほぼ間違いない。

事件直後に陳儀が蒋介石に宛てた報告には、あたかも事件の首謀者かのように、王添灯の名が一番目に記載されており、その後も長期間に渡って、生死不明のまま犯罪者の扱いを受けていた。民進党政権になった後、2007年ようやく王添灯の名誉は回復されたが、それはあまりにも遅い対応だったと言わざるを得ない。

王添灯の娘の思い出

当時の事件の様子とその後の王家について、王添灯の6番目の子、台北在住の王美恵（1940年生まれ）さんを訪ね、以下の貴重な話を伺ったので、ここに記しておく。

『1946年、母黄七がマラリアで亡くなった。この頃文山茶行（貴徳街、徳記洋行の隣の邸宅）には、常にお客がたくさんおり、いつも皆で一緒にご飯を食べていた。父は非常に忙しい人だったが、小学校に上がると、ちょうど父の事務所（中山堂）と方向が一緒だったので、朝は父の車で送っ



王添灯の娘 王美恵女史（中央）、孫黄秀婉女史（右）

てもらっており、何となく特別待遇だった。どんな話をしたかはよく覚えていない』

『二二八事件があったすぐ後のある日、朝早くに兵隊が沢山家に来たことを覚えている。子供は部屋から出るなど言われたが、下の妹と障子に穴をあけ、のぞき見したが、怖くてそれ以上覚えていない。翌日も又兵隊はやってきて、何かを探しているようだった。兄の政統（王添灯長男）を探していたのかもしれないが、伯父（水柳）の子、安邦が連れていかれたと騒ぎになった』

連行された王添灯については、親族が様々な手段でその安否を確認したが、結局その真相は掴めなかった。そして父亡き後、一家は当局に目をつけられる中、逼塞した生活を余儀なくされる。そこで家族を支えたのが、添灯の長男、王政統だったという。長男政統はその直前に父により香港へ出張に出されて難を逃れていたのだ。

因みに二二八事件後、多くの人が添灯に『危険だから逃げろ』と進言したが、『自分は何も悪いことはしていない。私は民衆のための活動しているのだから、逃げる必要などない』と言って、聞かなかったという話も出ていた。ただこの時点で、本人は既に逮捕されることを覚悟しており、家の存続を考え、息子を逃がしたのだろう。

『父が行方不明になった後、兄政統が中国から戻ってきたが、当時は何が起こるか分からず、皆恐怖で家に閉じこもっていた。後日兄から聞いたところ、『父から金庫の鍵を預けられた』と聞いていた。『人が多い場所の方がむしろ安心だ』といい、西門町の賑やかな場所に家を買って、皆で引っ



王政統一家が二二八後に住んだ西門町の家

越した。それでも災難が降りかかるのを恐れ、息をひそめて生活した』

『茶業を再開すると目立つと言われていた。ただ大家族を養う必要があり、兄は日本語雑誌（婦人クラブとかリーダーズダイジェストとか）の販売を始め、その総代理店となった。当時雑誌には厳しい検閲が入るので、色を塗ったり、紙面をカットするなどの作業をした記憶がある。その後証券ビジネスをしていたこともある』

『更には南部の知り合いと共同で Vespa などバイクの輸入代理店を手掛けたが、5年後に輸入禁止になった。西門町でパチンコ屋を開いたこともあり、パチンコ台の裏に球を詰める仕事などとした記憶がある。10年以上経過した1960年頃、ようやく文山茶行とは別に天祥行という名前で復活させることになった。二二八事件被害家族の戦後は、常におびえて暮らす辛いものだった』